

調べるほどに興味が湧く。そんな主催者の熱き思いがイベントを支えている。

2014年2月2日(日) 静岡県静岡市
有土山口ゲイニング大会

晴天続きに初めての土!

「雨男」だとか、やると雨が降ると言われながらも、この有度山トレイル三昧は5回連続での晴天が続いていた。まあこの時期、あまり雨が降らないのだから珍しいことではないけれど、それが初めて土がついた。今回、しっかりした屋根と暖房もある東海大学旧附属幼稚園園舎が会場なのでよしとしよう。青空会場であった土曜日のトレランが雨だったら偉いことだった。天気に影響を与えられるというなら、むしろいい方に影響を与えているでしょ!



当日はひどくはないがあいにくの雨。で一般市民を含めて欠席は少ない。3時間くらいで戻ってきた家族も、「(装備が悪くて戻ってきたけど)楽しかった!」。

昨年の6月に世界遺産登録がほぼ決定になった頃から、今年の有度山トレイル三昧は三保半島を舞台で、と思っていた。運良く息子の通った幼稚園が移転して、旧園舎が自由に使える形が残っていた。半島の先端に近すぎるのがコース戦略上ネックと言えネックだが、そこはCPの配置と配点でカバーしよう。趣向を変えて、A3版の地図を縦置きにして、清水の中心地まで入るようにした。これによって、これまで

届かなかった清水駅北西エリアが地図に入る。だらだら広がった市街地に、いいポイントが見つかるだろうか、ちょっと心配。

清水の魅力と歴史いっぱい

取材をしてみて、その心配は杞憂に終わった。杞憂というよりむしろサプライズ。清水市民としてその無知を恥じるような歴史上のストーリーやそれにまつわる史跡が続々でてきたのだ。

三保半島に囲まれた清水は日本書紀の時代からの良港で、有名な白村江の戦いに、天皇の命で水軍を派遣したり、その後も武田水軍の基地があったりと、日本全史的な話題には事欠かない。

極めつけは、毛利の両川として有名な吉川氏が清水出身だという事実が判明したこと。東海道新幹線が国道一号と交差するあたりに今でも吉川(きっかわ)という地名が残っている。吉川氏は頼朝に領地を安堵され、その地に住む豪族であったが、梶原景時の乱に対していち早く兵を出し、梶原一族を討ったことでこれまた全国区となっている。

その後、安芸に領地を得た吉川氏の戦の強さは際だっており、応仁の乱では、対する畠山軍が、切っても切っても戦う姿にやる気をなくし、「鬼吉川」「俎(まないた)吉川」のあだ名が着けられた。毛利家の養子から11代をついだ元春も戦の天才で、生涯76戦負無しの64勝。秀吉の鳥取城攻めの時には、岩見吉川氏の頭領が自害する中、応援にかけつけ、陣前の川を渡るや、その川にかかる橋を打ち落とし自ら背水の陣を敷く。その上、敵前の陣中で、毛利の救援の武将と宴を催す。それを見た秀吉が「死兵当たるべからず」といって退いたとか。勇猛だけでなく知将だったのだろう。

清水の吉川には、その子孫たちが奉納した石碑やら鳥居の柱やら、合祀した墳墓やらが今でも残っている。そんな清水の輝かしい歴史の前には世界遺産指定など、ほんのおまけに思える。

おっと筆が滑ってしまった。今回のCPについては話したいことはいくらかもあるのだが、紙面の都合でこれくらいにする。だが、ロゲイニングは土地を舞台にするスポーツだ。開催する土

地に対する主催者の思い、それを伝え、楽しんでもらおうとするホスピタリティーが、このイベントが参加者に支持されている理由なのではないかと主催者としては自負している。ま、流行り言葉でいえば、お・も・て・な・し。



清水らしいポイントの写真を二つ選んでみた。一つはおなじみ日本平からの富士山方面の眺め。三保半島は世界遺産になったが、歴史的な絵画の構図からすれば、富士山を見るのは三保半島からではなく、三保半島を入れた富士山なのだ。その意味では日本平山頂からの眺めは絶景の元祖世界遺産である。もう一枚は市役所の中に飾られている貨物船のスクリュー。港町の誇りが伝わってくる。静岡と合併するんじゃないかな!

特急のぞみ号、貫禄の優勝

各クラスの優勝は、男子が望月将悟・柳下大が組んだ「のぞみ号2014」。望月さんは地元では今や英雄扱いのトレイルランナーで、トランスジャパンアルプスレースの二連覇の覇者でもある。2位に380点の差をつけて優勝。中盤に、外周から一旦街中に入り込み距離を増やすルートや後半に有度山に登り返すルートは、力がないと挑戦できない。

混合はウィンドラン A の垣本悠太・

遠藤範子組はロープウェーで山頂に上り、山頂付近の高得点を卒なく取っている。最後は時間が足りずに、三保半島に200点を残しているのは惜しい。潜在力は完全には開花していない。

女子組はTEAM阿闍梨&くりの田島利佳・栗田由希子組で、オーバータイムしながらも走って稼げる底力は協力だ。ルート検討しても、得点を増やせるルートは簡単には見当たらない。戦略の完成度が高いということだろう。

家族組はトータスの国沢五月・楽親子だが、中学生を含んでのこの得点は素晴らしい。渡船の時刻を考えて、最後に三保半島を残した戦略の成果だろう。

ビギナー(3時間の部)はTEAM阿闍梨の小泉成行・福西佑紀組であったが、途中の見通しがあれば、まだまだ点を伸ばせたかも。

交通機関(ロープウェーと清水港の水上バス)をどう使うか、配点の弱点をどうついで得点を伸ばすか。作戦面でも多様な楽しみ方ができるコースが提供された。

一方、トラブルも……

結果的にはつつがなく終わった大会だが、ロゲイニングのレース中に地元とのトラブルがあった。世界遺産にも登録された三保の松原の御穂神社からだ。ポイント自体は境内におかなかったが、門前の鳥居をポイントにしたため、ショートカットで境内を通過したチームがいたのだ。早い時間帯に連絡があった関係で、役員がすぐ対応。謝罪するとともに案内の人を立て、参加者の整理をおこなった。幸い、イベントそのものには理解を示していただくことができ、励ましの言葉もいただいた。

ロゲイニングの大会が増え、参加者も増えている。それは喜ばしい反面、スポーツの背景に明るくない人が増えていると感じる。主催者のコース管理も甘かったが、こうしたこともトラブルの遠因にはあるのかもしれない。公共の場を使うスポーツとして、細心の注意が必要だと、痛感した事件だった。

ボランティアとプロのハイブリッド運営

この大会の競技的な主要部分は村越が一人で、休日のトレーニングを兼ねながら行っている。事務作業はNPO法人Mnopの事務員が一人でやる。もちろん、大会当日は、オリエンテーリング関係者の多くの支援を得ている。静岡

オリエンテーリングクラブの方には、前日のトレランからロゲイニング当日の写真チェック・得点計算まで力を発揮してもらった。またTEAMあじやりのメンバーや、TREKNAOの伊藤さんとその研修の参加者の皆さんにも実技研修と称して、写真チェックのお手伝いをいただいた。プロフェッショナルの高い技術とフルタイムの馬力、ボランティアの熱意をうまく相互作用させることが、今後のオリエンテーリング界の一つの大会開催のモデルになりえるものではないかと思っている。

堀本杯について

大会報告でも触れた静岡オリエンテーリングクラブに、堀本洋・睦夫妻が入ってきたのは、もう6年半前のことでした。県職員の要職にありながらもアクティブな生活をされていたお二人は、テニスやサイクリング、のちには登山を楽しんでおられました。中でもオリエンテーリングとロゲイニングにはよく参加され、特にロゲイニングは常にお二人で参加されていました。この有度山トレイル三昧でも、土曜日のトレランの運営は常に真っ先にボランティアとして名乗りを挙げ、ロゲイニングにはお二人で参加するという熱心なサポーターでした。

そのお二人の事故の一報を聞いたのは、昨年2月12日朝の寝床の中でした。西穂に登るといふ話は聞いていました。山岳遭難を研究テーマにもしている私は、そのとき「帰ってきたら、顛末を聞き出してやろう。」新聞にも掲載された事故の第一報は、そんな気にさせる、どこにでもありふれた遭難記事だったのです。しかし、ありふれていなかったのがその日の天候でした。滑落した睦さん、助けるために斜面を降りた洋さんを助けに、ヘリが飛ぶことはできなかったのです。

還らぬ人となったお二人のロゲイニングとの関わりを記念し、ご遺族の承諾もいただき、今回堀本杯を静岡オリエンテーリングクラブとともに作成し、ロゲイニングでは常に激戦で華でもある混合のチャンピオンに贈呈することにしました。

当日は、ご遺族の尚様にも起こしいただき、杯の贈呈をしていただき、改めてお二人のロゲイニングやオリエンテーリングへの思いの深さを知ることができました。謹んでお二人の冥福を祈るとともに、お二人の足跡が長くオリエンティアの記憶に残ることを願います。



堀本杯を手にするウィンドランAチーム。左から二人目が堀本さん、一番右が遠藤さん。中央に立っているのが堀本夫妻長男の尚さん

(村越 真)